

相馬市飯豊地区

1 想定するモデルとしての姿、モデルとする事項

- 大豆2年麦1年のブロックローテーションを適正に実施し、適期作付け、管理の徹底により品質向上を目指す。
- 小麦立毛間播種作業の実施により播種準備、播種作業の労力削減を図る。
- 奨励品種「さとのそら」の栽培体系（栽培暦）の確立及び管内小麦生産者へ周知と普及拡大を行う。

2 生産概要（中心的な担い手の概要）

- 【R3年作付面積】水稲:14.8ha、小麦:21.3ha、大豆:47.2ha、ブロッコリー:0.8ha
- 東日本大震災の翌年（H24年）に法人設立。相馬市の津波被災地に作付け
- R6年の小麦作付け面積は25.0ha
- 大豆2年、小麦1年のブロックローテーションを実施（大豆→大豆→小麦）
- 小麦は、省力化技術「立毛間播種」に取り組む。



R6年産出穂期頃の小麦ほ場の様子

3 取組のポイント（モデルとして構築する取組）

<品目別のブロックローテーションを実施>

- 大豆・小麦のブロックローテーション実施により、雑草の発生抑制・大豆の品質向上

<需要に応じた生産・普及拡大を実施>

- 作付けする品種は実需の動向を考慮し、新品種をいち早く導入
R5年に「きぬあずま」から「さとのそら」へ全面積で品種転換
- R3～5年産にかけて、JA主体で「さとのそら」実証ほを設置
JA全農、JAふくしま未来そうま地区本部、浜地域研究所、相双農林普及部で連携して、実証ほのデータを収集。実証ほデータを活用して、管内生産者へ栽培指導、普及拡大を実施

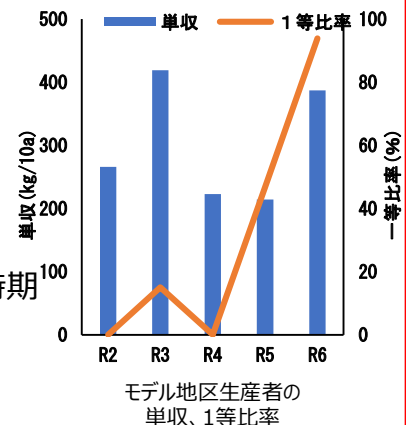
4 取組成果

<小麦生産の高位安定化を実現>

- ブロックローテーションの実施、新品種導入により、1等比率向上
1等比率 R3年:1等14.7% → R6年:1等93.9%

<小麦新品種「さとのそら」の普及拡大>

- 関係機関で連携して「さとのそら」への品種転換を呼びかけ、面積拡大
相馬地域R6年産「さとのそら」作付面積 112ha（全体の約4割）
- 浜地域研究所と連携して「さとのそら」に適した後期重点施肥や刈取り時期の判断方法について管内小麦生産者に周知し、単収、品質を確保
R6年産相馬地域「さとのそら」単収 348kg/10a
相馬地域上位等級比率(1,2等) 96.0%



5 課題（7年度のポイント）

- 相馬版「さとのそら」栽培暦をもとにした指導を実施し、収量・品質向上に繋げる。
- 関係機関と連携して、小麦生産者に対し、指導会等で「きぬあずま」から「さとのそら」への作付け転換を呼び掛け、「さとのそら」の面積拡大を図る。